

2023年4月16日 礼拝説教要旨

詩編講解説教144「小さき者の祈り」

詩編144：1～8、Ⅱコリント6：4～10

ギリシア語で書かれた旧約聖書『七十人訳聖書』によりますと、第144編の表題のところに「ダビデの詩」とあって、その後に「ゴリアトに対して」という言葉が付け加えられています。ダビデ物語の中でも、ダビデと巨人ゴリアトの戦いの話は比較的馴染みのある話だと思います。ダビデとゴリアトの話はサムエル記上第17章に出てきます。これはイスラエルとペリシテという国との戦いの話ですが、ペリシテ人の中にゴリアトという大男がいて、イスラエルに戦いを挑んできます。イスラエルはこのゴリアトを見ておそれおののき完全に戦意を喪失してしまう。しかしその中でたった一人ダビデだけが勇敢にゴリアトに立ち向かっていきます。サウルが「お前が出てあのペリシテ人と戦うことはできはしまい。お前は少年だし、向こうは少年のときから戦士だ」と止めますが、ダビデは「わたしは獅子も熊も倒してきたのですから、あの無割礼のペリシテ人もそれらの獣の一匹のようにしてみましよう。彼は生ける神の戦列に挑戦したのですから」と言って、ただ石投げ紐だけを持ってゴリアトに向かいます。

わたしたちはこういう小さく弱い者が強者を倒す話を痛快に思うでしょう。でもそこでは自分の願望を投影して、強さに憧れ、今は弱くてもいつかは打ち負かしてやるというような成功物語を望んでいるのかもしれませんが。聖書が伝えようとしているのはそういう話でしょうか。あくまでもこの時のダビデは少年のままですし、小さく弱いのです。でもそのダビデを神さまは用いられ巨人ゴリアトを倒されます。「この戦いは主のものだ。主はお前たちを我々の手に渡される」（サムエル上17：47）これはダビデの戦いというより神さまの戦いです。出エジプトの時もそうです。前は葦の海、後ろはエジプトの軍隊が迫り、イスラエルは窮地に立たされた。そのときにモーセは言うのです。「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」（出エジプト14：14）そのようにして小さく弱い者のために神さまご自身が戦われる。だから強い。わたしたちが強いとすれば、それはわたしたちの強さではなく、わたしたちのために戦われる神さまの強さなのです。パウロも「わたしは弱いときにこそ強い」（Ⅱコリント12：10）と言います。わたしたちは弱いままですが、その弱さの中にこそ神さまの恵み、力が現れるという信仰があります。

今日の詩編に「わたしの手に闘うすべを、指に戦するすべを教えてください」（1節）とあります。わたしたちの闘う相手は誰でしょうか。パウロは「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」（エフェソ6：12）と言います。それはわたしたちを神さまから引き離す悪魔、サタンです。悪魔はわたしたちがまともに戦って勝てる相手ではありません。あのアダムとエバの誘惑の話のようにいとも容易く悪魔の誘惑に負けてしまう。それゆえにわたしたちの人生はいつもどこか雲行きが怪しいのです。様々な出来事が神さまから離れる要因になります。試練だけではない。良い時も傲慢になり神さまから離れます。理由をつけては、それを口実に神さまから離れようとする。それほどにわたしたちは弱く小さい存在です。それがこの詩編にも謳われています。「人間は息にも似たもの、彼の日々は消え去る影」（4節）これは人間がいかにか弱く、儚い存在であるか。それは息のようで、消え去る影のようなもの。そのことをまず自覚する必要があります。

今日4月16日は熊本地震の本震の日です。7年前2016年4月16日の未明に起きた地震はわたしたちの存在を根底から揺さぶり、ひっくり返す出来事でした。生活だけではない。その考え方、価値観もひっくり返された。これまで自分で立っていたように見えてそうではない。今も熊本にはひずみのたまった断層が残っているそうです。学者は「また地震が起きるのは明日かもしれないし100年後かもしれない」と言います。そんなにも危ういところにわたしたちは生きている。何一つ確かなことはない。地震だけではない。病気もするでしょうし、老いていくでしょう。できていたことができなくなる。人間は本当に儂く弱いものです。あの地震はそのことに気づかせてくれました。

でも同時に、その弱く儂いわたしたちを神さまは見捨てずに憐れんでくださる。そこに希望があり救いがあります。「主よ、人間とは何ものなのでしょう。あなたがこれに親しまれるとは。人の子とは何ものなのでしょう。あなたが思いやってくださいとは」(3節)原文ではここに「知る」「思う」という言葉が使われています。どんなに小さく弱いわたしたちでも神さまは知っていてくださる。思っていてくださる。そのような憐れみの中に置かれている。そしてそれは思いを突き抜けて、わたしたちのところに現れました。それがイエス・キリストです。「主よ、天を傾けて降り、山々に触れ、これに煙を上げさせてください」(5節)「主よ、天を傾けて降り」キリストの到来はまさに神さまが天を傾けて降られた出来事です。あの十字架において、わたしたちの弱さの中に、儂さの中に入ってきてくださった。そのようにして死の極みまでも知ってください。思ってください。そしてそこから解き放ってください。それがわたしたちの力なのです。

昨日、先輩の牧師が地震から7年を覚えてメールをくださいました。「十字架の言葉をこそ響き渡らせてください」と書かれていました。教会の十字架を見上げるたびに思います。全国からの支援であの十字架の塔は再建されました。地震を忘れないようにロビーの黒板には今も手紙が貼ってあります。困難の時もわたしたちは決して一人ではなかった。祈ってくれる仲間がいました。わたしたちのことを知り、思っていてくださる人たちがたくさんいました。だからこそ立てるのです。弱いけれども弱くない。「それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです」(Ⅱコリント6:10)とパウロが言う通りです。新年度が始まり、今日は総会もあります。教会も弱さを抱え、破れを抱えています。その弱さに愕然とするかもしれません。しかし主が共にいてくださる。だからこそわたしたちは立てるのだということを心に留めて歩みましょう。

天の父よ。本当に弱くて儂いわたしたちです。けれどもそのわたしたちをあなたはご存知でいてくださり、思っていてくださいます。それゆえにあなたは天を傾けて独り子をお送りくださいました。そして共に生きる友、信仰の仲間を与えてくださいます。どうぞその心強さに生きることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。